

特別
~5
6056.
3





松永貞徳永代繪所傳記卷之二

古忠者承定代事

親重入道立甫ハ太子集代わつそひより貞徳也
と稱せ一流と云く風俗を杜あしむるに非ざる
と上京風あり向傳り居りしに謙言ふべくん
信之うらぐし上子の門才敷多あり多し此子向
板形志て貞徳母ありて世りしをり謙武法の
鼻ひり子孫編集也二冊ありたつて詔巴至寶抄
れり貞徳の御りしやう合相遠ありあはれ
一流の控せられし門才そ瓜信用也初ん仕なり
やとてわがしそ瓜守寶と云細工法とてて發

野に多き雑踏の花は得られぬも実事なる事なく
ありたるとん結ぶるを大女房と見てはついで
申さばらうと云ふがごとく

あつそく花の形は枝葉も
ひらひら心餅を白くは後水

松はまゝ入道維舟ハ女子集のわつそひよそく身徳
ととみれ一語と存しんぬを心むるは身徳流
あそかりきん立甫流あもわつはげふあつそく
て磯もと波あもつとみれは女子集のあ後毛吹草
と編集とび書あそくは季の名物と十二月ツキふりけ
て記す流書の俳ノ名物とわつりて世話の卒とん
とわつあそく今俳諧のあ後定あ流あはあそく
わつこのせきりりび書初心はあつひのうあそく
比歌かうとて室室の物とてあつ編集はあつ
流人そ流りてとあそく世女吹草影と流之其
あそくかうりてとあつ後集とあつとあそく

うそくはし。身徳流く。立南端のさうんおる侍
 御しつりくまぎけどたうしやんまきまのりび道
 小まのりて。刃研と雑踏まうくまきり。如きり
 編集の物 女子集 毛虫系 時世安 海世とる
 懐子 乳母 依松沖山 大井川為それ及雑中
 此組師とかりて。まね取小今と紙信用と。
 依そ松う江傍の維舟とま。海舟名紙付と紙
 ちるま。但ふのこの風ハ句作りま伊達河あり
 て。威勢たうま。たうま。早あわありれううれ紙
 張知て。おる句と。いんまのり。



大空をひらきまはるるわらわれ
青柳の糸つとむねの羽衣を揺るめ
われをいつてもるもあふの下のから
よりひ七十にめて逝きて

辞世

見んこも也善提樹のどひま汲清水

玄舟軒山本あまの身徳翁のま習よこ十二家より
身徳らいついの執筆とはあつひく一生勝りて
かれと離譜よかりて、割断波ひらく集と編集
と身徳死後自分も、砂金袋前後集ヲ編集也。
和弄の舎よまゝりりて源氏みんが、孤情入一華堂

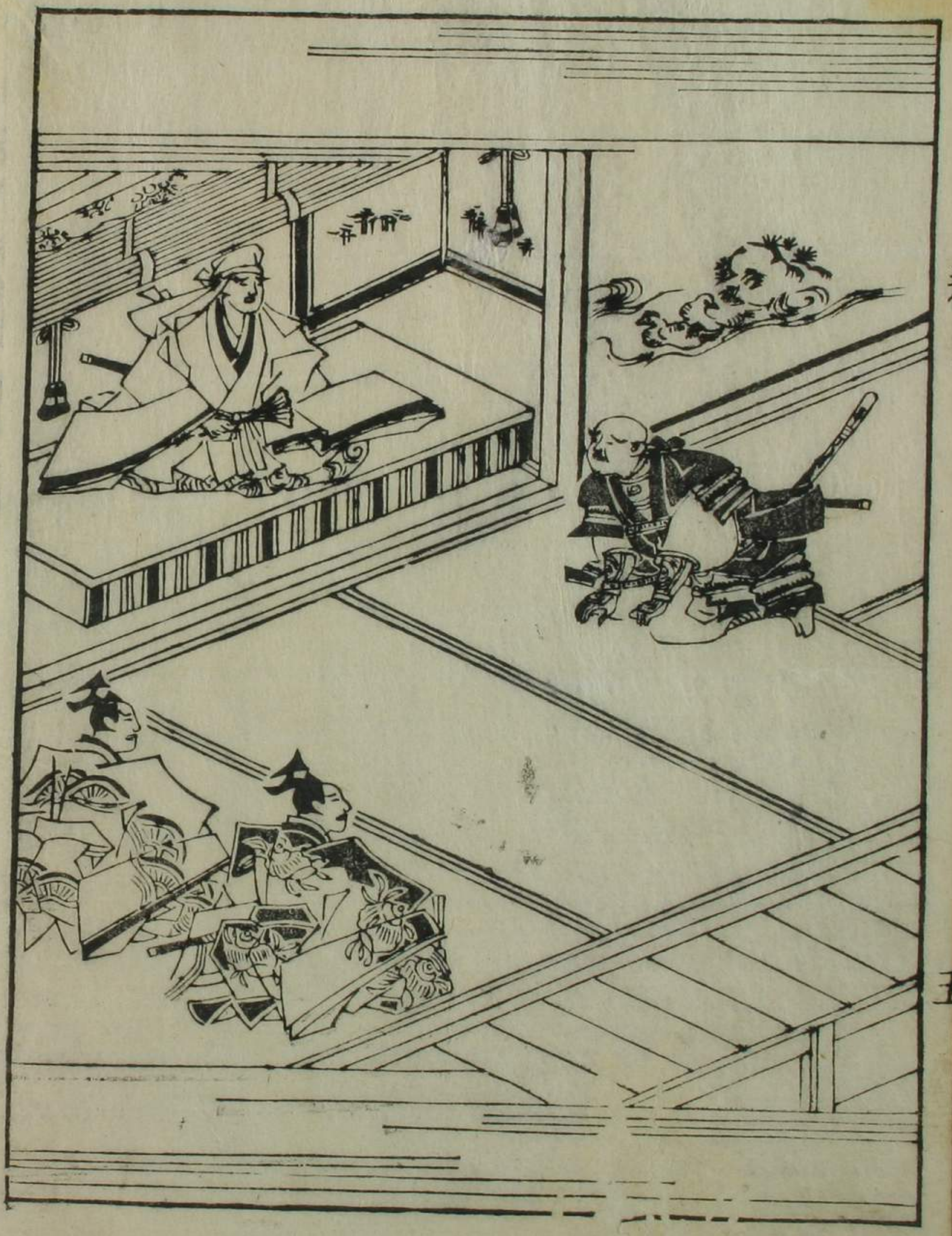
らり古今の策と傳文一勝よまゝりひく一生の
とて、古実とまゝり、離譜あも、花あつ事と不
好教子うきととわああひ、南華、滑稽書とわらうす
らしせと、古風と捨られく、世らの為風よつて、
離譜あも、神と、詠人皆下よくと、つり、ま、年
七十とあく、逝と、門才教多、追名、八言、あ、吐

辞世

東のゆき花まひくも津土門 西武

成、三月十二日

山本あまの心き標あつと、とすく、花あつ、
まよれたつ、たとて、佐野の源、あ、古具、と、ま、
福倉教の御あふ、こ、ま、あ、つ、



鶴冠井原徳八嵐山集の撰者一生涯徳小治
 て右風とあつり排辨ととふてく免おりり
 幸しくおつたあは排集にほくさく入秘ん
 うきそ紙かよりくも名世らるる志りね貞徳
 逝去の後年と経としておりりあつる半強多し
 いん秋の月紙らんやありありわろくさ病氣
 ぬさしおありあり

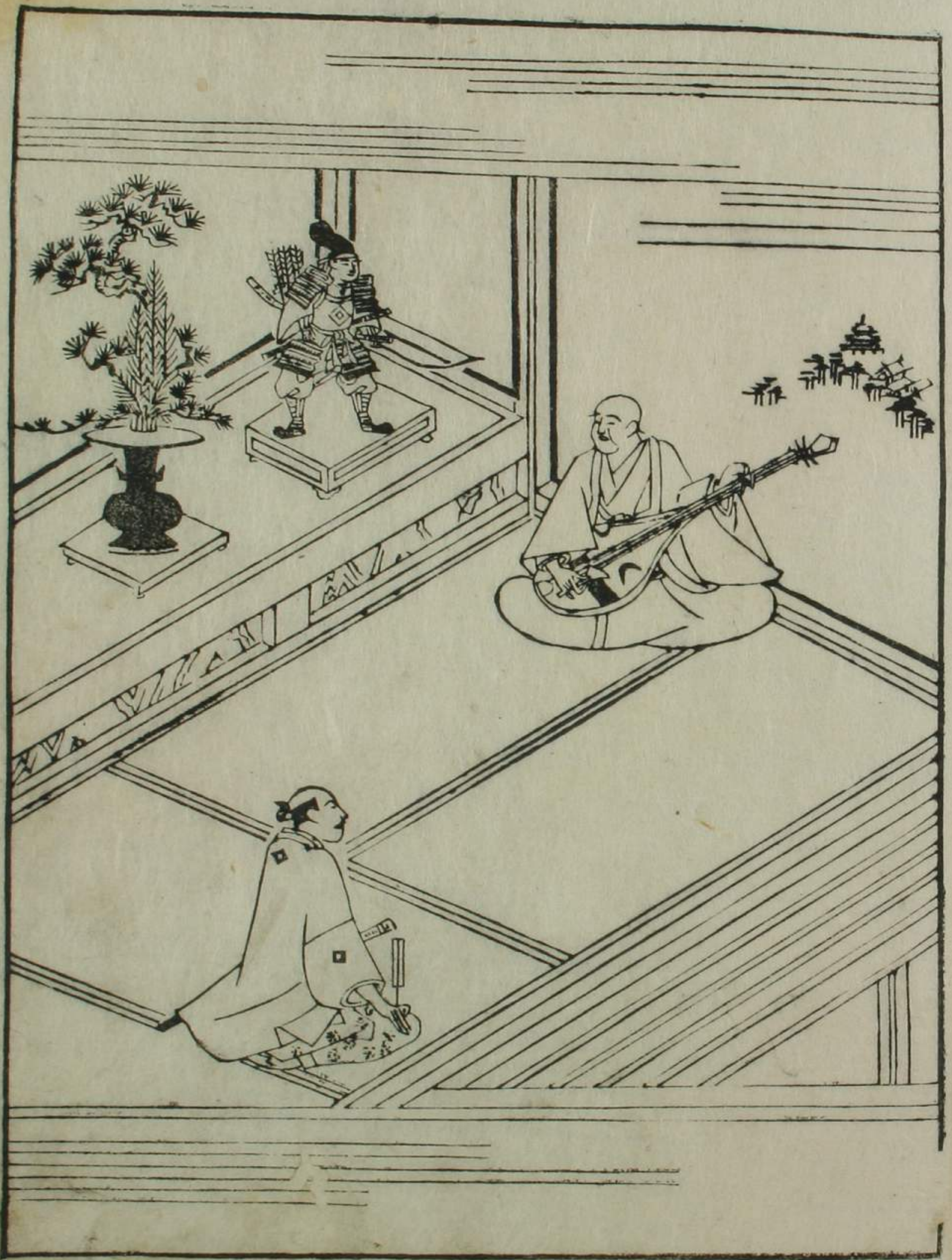
けらおくくおらおらおら
 川うま家や細代の伝も



安原正章入道身室ある。生れ付一物もて。読るる
 筆量凡流と好あり。文才も達なるめて。た事来
 歴とく。是く。俳諧一才たれといふれ。一生
 重頼とのり。所ひ。終ま。まけと。玉海集と。あつと
 多。これ。俳書。編集と。西武と。なり。んて。俳門と
 二。口。子。引。く。俳。近。と。あ。く。大。屋。う。へ。後。め。八。路
 色。と。と。は。く。辛。泉。と。く。海。花。六。雨。せ。わ。の。月。れ
 多。く。神。書。れ。わ。い。と。を。玉。の。名。あ。り。か。く。器。聖。と
 川。笛。吹。活。針。の。俳。才。と。拙。子。定。め。た。世。の
 時。あ。り。た。れ。回。冬。う。り。の。り。は。よ。き。ま。い。ハ
 明。子。年。の。筆。且

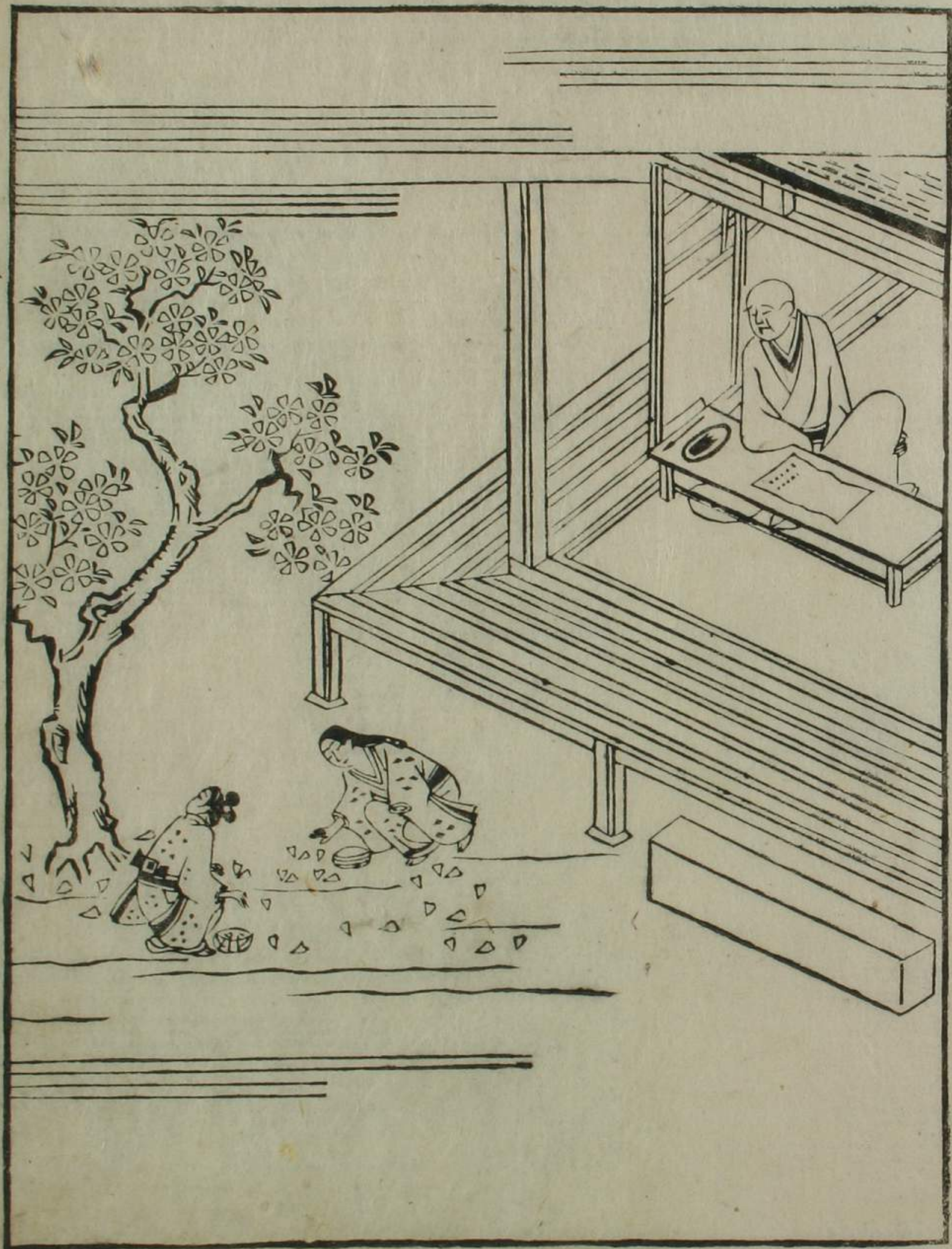
東野年々おちも湯まつりく會々

元日を腸痛の内なれく是疾の業且常よりり、
 わりまてとて、後人けりて其心と正章 千句とて
 貞徳拙鳥の千句と、梅紫一言、弟秋竹とて、
 作く、削て、身室こくと、蠅打といふ書作王、
 大津乾重次と作者ありく、そは、教と、排路一乃
 のつくと、ある、編集の物、玉海集、同、追か、氷室
 守、悲母、追、長、百句の、身、注、千句、鳥、女、又、多、く
 百句、爲、く、一、生、排、路、の、す、く、た、と、く、六、具、何、爲、
 後人の、あ、し、松の、一、多、み、さ、く、あ、う、あ、く、



東野年々

會々



いづくにまほれらるる女もくれば拾ひの空
 ちるうあ〜

神々の梅の白ひや伽羅衣
 山びこしてくまなくまな

淀川へ捨る所と書て掛り見物敷くや人々
 わつり通しうとむひくお申へ事りて見れたなり
 清ありまきしつりお申へ事りて見れたなり
 言のうハかりきしそし隸踏勢昌北前表と判
 とれん者事なれたをじて正月物の長者舞よ
 作事し系うらんこれお申へ事りて見れたなり
 事をも又自知し申緒もさく所近も明くお申へ事
 向舎や前白附杯ありてはあつひ百白とさく物
 狂の者へもや自之れ之物と隸長者やさうて人々
 ちり申へん免され一とむひくお申へ事りて見
 板形し秘する物屋しせお申へ事りて見れたなり

屋うま小狭と取れ免申へ事りて見れたなり
 板書の板形物一枚之様つとてお申へ事りて見
 せる長者もさうとやあ申へ事りて見れたなり
 秘と上はくこれお申へ事りて見れたなり
 所れありうし舎のさうしお申へ事りて見れたなり
 言あり長者もさうとやあ申へ事りて見れたなり
 風さる長者もさうとやあ申へ事りて見れたなり
 よ我のよ長者もさうとやあ申へ事りて見れたなり
 ちり申へん免され一とむひくお申へ事りて見
 判よたんとて屋の丹とわらうてお申へ事りて見
 れり申へ事りて見れたなり

此の排士もさうもや。いふ屋う。此は道なれん。其の
 わらう。さあ。わらう。わらう。元一。さあ。やう。あ。な。を
 き。た。の。海。島。名。の。分。小。無。わ。ら。う。と。芳。名。わ。ら。う。道。な。れ。ん。
 庚申の代。訪。う。お。佛。餉。あり。と。も。供。ふ。心。も。自。也。と。あ。
 き。う。う。く。け。い。又。さ。言。わ。り。系。年。六。年。人。の。内。あ。り。二。三。
 量。わ。り。て。排。仙。よ。お。う。と。思。島。名。の。は。し。文。文。陸。
 又。前。目。中。緒。借。性。れ。う。う。と。島。名。も。ま。ま。入。ま。れ。ん。
 河。口。の。あ。も。常。に。但。一。排。と。も。派。な。う。秘。の。千。排。狂。
 礼。と。同。一。羽。之。重。の。巻。派。よ。な。り。て。安。実。日。わ。ら。う。の。
 島。名。前。口。行。う。と。時代。よ。な。き。り。わ。く。派。う。と。排。道。
 小。落。わ。ら。う。奴。も。う。と。あ。と。た。う。あ。家。人。を。見。ん。う。と。り。て。

排士もさうもや。いふ屋う。此は道なれん。其の
 わらう。さあ。わらう。わらう。元一。さあ。やう。あ。な。を
 き。た。の。海。島。名。の。分。小。無。わ。ら。う。と。芳。名。わ。ら。う。道。な。れ。ん。
 庚申の代。訪。う。お。佛。餉。あり。と。も。供。ふ。心。も。自。也。と。あ。
 き。う。う。く。け。い。又。さ。言。わ。り。系。年。六。年。人。の。内。あ。り。二。三。
 量。わ。り。て。排。仙。よ。お。う。と。思。島。名。の。は。し。文。文。陸。
 又。前。目。中。緒。借。性。れ。う。う。と。島。名。も。ま。ま。入。ま。れ。ん。
 河。口。の。あ。も。常。に。但。一。排。と。も。派。な。う。秘。の。千。排。狂。
 礼。と。同。一。羽。之。重。の。巻。派。よ。な。り。て。安。実。日。わ。ら。う。の。
 島。名。前。口。行。う。と。時代。よ。な。き。り。わ。く。派。う。と。排。道。
 小。落。わ。ら。う。奴。も。う。と。あ。と。た。う。あ。家。人。を。見。ん。う。と。り。て。

一。高。年。大。坂。より。排。士。多。く。事。を。て。只。今。と。い。ふ。と。あ。じ。
 と。海。島。の。島。名。前。の。排。道。中。に。死。う。と。思。を。は。は。れ。ん。
 若。島。者。は。う。の。子。数。十。人。六。角。堂。と。倉。前。あ。り。て。一。
 二。倉。前。あ。り。て。一。と。也。連。島。の。中。に。何。も。派。道。近。う。

わのどつ産とさるを夜中へ申すおらあけりて
 家傳の長者をなす一産はと申すは若くは成らや
 まあそ父母れこく先謙と立教を降道れこく
 面々謙退とせりあまふいごら神妙なれこらん
 皆表謙の玄法よりたたりて歴々此長者をも回
 摩する大心をとんとあつり終止すあれよくと系
 中の辨判へ平らゆべれ中あも今長者ふかり
 さあそ急量わきえ道法初く自まよる謙士も
 ぬりりーがわこやげ時をたねぐ長者とせぬが
 換へしゆりぬれ下はくろひせし海の方ま
 とらや未終れ分ちていぬぬるひま用平の巻し

わあそ前句附りし事とああ人高時系あてを
 句と見まると人まへく次びるへを指あくとぬれ
 をし去まると謙語あれ事とゆせれんされんそ
 大事れしと成おるわき本蜂法那う舞ハあうとん
 海山の狸席そよむこれ云あくと人をさへ家ハあつ
 中あつへらまごら古今集の中あていふの辨ま
 乃のわあうりも権法のものそむいりし今
 世の中も是といふ款とこらめん人多のれあつ
 中いさまこり然ハ謙語の連あついふくこ家傳
 謙言はよれぬ僕の句は成りこ又成りこつて
 せし連あれあつとこかひよなまきり又る能あつ

たりと座の種も敷し若びて
祿くささうぬまも先う那

一宮川正中八身徳の辨才りまうに不知操梨一
常しく同朋の辨士なれど身門えもまろく座れり
又盤亦以悦やうに壽の乃ぞし秘言古せりといん
連ふれ大事をく傳文やうしとわらん標箇此跡
とらう一有起羽三重まう紀出林鶴う物也身徳
虫身此系島めそのせうり辨才りて亦道辨道小付
てと身徳と志のふらう一わうりこの中実辨才
して今秘をふれ志とらやせりともやげ度いり形
事ふら身徳遠肖の辨士とまもけ亦羽三重地板
の心う一わうりまもやいりも内徳ま子細もく不
び度板のけは羽三重めく身徳此辨乃れ授

滅法は法事と云耶。されねむいふもや。道理と
法と云くともめはゆるし。たはし。諸人は法を先
んがねし。一分の云うけをさすれ。お身ひら川の
名利は海よりなれ。所存のまこれ。法事は。いもま
さうを。我人わや。法より。そは。身徳の系圖あり
し。法教

一若月菴似形を。身徳を。牙。新。好。安。静。の。門。分。と
やうと。なる。し。此ハ。身徳ハ。祖。父。の。所。へ。び。夜。廻。一。重
み。法。合。し。て。身徳。遠。肖。の。邪。事。と。極。行。を。し。て。
い。ゆる。名。は。れ。う。り。執。を。や。む。中。離。の。長。者。中。は。

を。慈。量。の。業。務。わ。り。く。苗。代。水。な。と。玉。徳。と。海。や
う。の。わ。き。こ。り。若。離。の。時。所。道。安。靜。子。に。た。れ。て。
是。見。も。る。人。を。れ。く。自。身。此。慈。勇。わ。り。う。ん。事。斗
且。海。う。ひ。く。う。し。お。う。林。鶴。と。も。あ。て。系。羽。二。重。法。う
ま。に。お。し。や。を。離。と。う。わ。き。物。卷。た。か。ら。且。う。ら。塔
教。事。お。う。謙。退。の。道。山。を。大。さ。お。る。所。や。ち。り。な。り。
さ。す。が。翁。此。孫。中。子。と。う。て。所。離。滅。及。此。離。書。法。の。法
し。か。く。法。傳。と。る。事。い。う。所。傳。謙。退。と。く。何。と。そ。の。が
ま。あ。ら。の。の。が。う。ん。と。た。り。た。先。上。系。の。離。点。者。何。道
羽。二。重。の。逆。織。と。あ。く。し。い。と。な。れ。ハ。あ。ら。り。せ。め。て。是
非。なり。身。徳。翁。よ。老。毛。か。く。し。法。法。と。て。は。離。道

の配ある事と云われぬは皆自分此名利計ありて
 ちの事邪道よあはれくち知止千万の弱くらん
 紙の事あはれ傳へてまう大事の者目と梅鶴く板
 紙ふくしていつくを新排式と違くとてくを
 奥書よてしてたやとてあ事仲く排士いつか
 ち別そやと世人此にすうとぬれんわくこの不
 じやり

一併名信徳ハ高梅盛骨隨の門才之西氏令地
 身定くし余の如く排積修り年久せぬ時代
 の排士あく一筆量あて秀逸此排修も集毎日

教ぬえつららうと流まで長者と不好一五年以
 来そののころは長者小成りやえんころは
 羽二重に奥書せし事いつかするや出葉物と
 ちぬあをわし又新排式とたやとて款もあし
 推量とあはげんし奥書させうの余人も是後
 かく事ぬるくと梅鶴うだまてうを流し自余の
 長者し何のりき流しとて余情斗ふらよとて
 書く款もあて一筆九十三人此仲あ又よく志の
 手傳所契てのせう人もわらんうのあありん
 世の事半なれんそ流うてとくむらあわの
 系羽二重世あてひらまうて末代まで物心

人これをも中と信月せん事自徳翁の大敵
 あれんうしく此わやまり成さうけ此等いおいて
 排道一道ののみありやとみうら末代もくも自徳明
 心居士とくうの人の丸おけしあんとくう成
 のづく自余のめくもくうりもくもあかの事と
 深う事排乃よ一勇をなけ打物ぬし

一如泉我黒いあ人き中排の長者をけん世りあを
 ちんあゆる集量わり長者とかなりていんう
 うく排也け度わやまりて羽之まの奥も此人教
 だれん飛なりてちんうけ排のうれん此事也

排なり古排七仙の伴何事の内身やし傳排を
 たりんあく福九自徳と遠背よるんうくあ
 ちんうけ共一分の集量もゆへは翁のうく成
 う海くあひくううし此うも此わやまり成局し
 け外奥すれ長者十人きくち冬近年め三年
 の息名いつくいつあは排流なるん中緒とく排
 く兼筆成排もいつぬれんとくひまにおうた
 け度羽之まの奥もわやまりて中系津の排士
 名沙流なれぬめんく此ら分ぬくうあしんを
 行しんうりく自分此予うあふ此次は評判紙
 書付たり

存の鳥着何も奥書と後板をせ度板のつれ多
ふうへ志れ侍きた自身中に後板せざれん不力
及依るい書成作るとせり流布の羽二重れ鳥
とけつ海舟りて下巻へ系羽二重の筆跡なれん
又十余人此鳥着計より依れ具負なりくわらひ
計のぞく一利とくけ侍敷事をも又相云ならし

江島前付附事

尚時前付附事なりて都鄙遠まて、排摺流布
正侍中より排摺又う波の玉濱の志砂のくみか海
排士去とらへりて何そふも源流とせりぬきん
大君の御代業へんと東海にみらのく山に金花
石山を愛して嵩山とせりむりて今もなれん
南都大佛に再具の時よまされあふまのお付也
志賀の郡に流ありて 天智天皇此秋の國にり
かの唐に此の山くくこの河製よりて波風流をこ
りて書御の系きくも書の家にありうせぬ本の系
の沖に侍守まてを船をけり細とらぬる片也

あり八の揚子十炷香屋の物ありすうたけ物ハ
 ありしり或とも紙短冊ありて盃杯のやうひのま
 何方ふこころを考へても見ゆりてはなるもその
 うなるもいふ所より書出さばはうねりてく面く
 舟捨仕給へ地まとも結く付向とらん事先
 今初ハ皆くはくねり長老も是う花なれども
 小欲知足と云事わきハ商物とらるは了も
 こや玄年よりうらうらうねり法多々れハれ
 身此ハ一也成事之かくいつく事一人して謙語の法
 度と行くやうな事たび事也長者の伴見見する
 人まへうらうらうねり書物の次もなれり見此



